

『狛犬様とないしょの約束』

著：高月まつり

ill：明神 翼

冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを二本取り出し、一本を琥珀に渡してやる。

「お前はそのまま、夕方の営業時間まで休憩に入れ」

従業員用の大きなテーブルに料理を並べ、向かい合って席に着く。

「え？ ちゃんと働けます」

「初日から焦っても仕方ねえって。疲れが顔に出てる。お綺麗な顔が台無しだぞ」

「それは……その、こんなに大勢の人間と話すのは初めてで……」

「お前の住んでた所は、ずいぶんな田舎なんだな」

「はい。昔は大勢いたんだよって母が言ってました。空が綺麗で空気が美味しくて、だからか、病気療養でやってくる人の施設がいっぱいあります」

心に、今の言葉が引っかかった。

「あー……俺もな、子供の頃は体が弱くてさ、夏とか冬とか、長い休みの時に母方の祖母ちゃんちで過ごして……」

今気がついた。たった今だ。とても大事なことを忘れていたことに気がついた。

新は「なんだっけ、俺は何を忘れてるんだ」と呟き、拳で自分の額を小突く。

思い出せそうで思い出せないのは、背中が痒いのに手が届かなくてもどかしい気持ちに似ている。もどかしさはすぐに苛立ちに変わるのだ。忌々しい。

「そのうち思い出しますよ。きっと。今はとにかく、この美味そうな料理を食べましょう」

琥珀の笑顔が、なぜかあの少女に重なる。新は思わず「お前に妹か姉はいるか？」と聞いた。琥珀は口いっぱいに肉団子を頬張ったまま、首を左右に振る。

「……そうだよな。だって、頭に耳が生えて尻尾が生えてる人間なんていねえよなー」

やっぱあれは、疲れた脳が自分に見せたものなのだ。それ以外の何ものでもない。

新は小さく笑って肉団子を食べようとしたが、「人間じゃないですよ、それ」と言ったので一旦スプーンを置く。

「気持ちの悪いこと言うなよ」

「思い出せないなら思い出せなくてもいいと思います。これからまた、新たな関係を作って行けばいいんだし」

「お前、何を言ってるんだ？」

しかも関係ないだろと付け足して言ったら、琥珀は酷く傷付いた顔をして目に涙を浮かべた。

おいホント、勘弁してくれ。

「小学生じゃあるまいし、いちいち泣くなよ。俺はお前を苛めてないぞ」

「分かってます。俺が勝手に泣いてるだけです。涙もろいんで気にしないでください」

「目の前で目に涙を浮かべてたら気になるっての。ほれっ」

ティッシュを何枚も取って、それを琥珀の顔に押しつけて涙を拭いてやると、「痛いです」と文句を言われた。

「だったら泣くな」

「……新さんは優しい人だと思っていたのに、実は違うんですか？」

「俺は男には優しいと思うぞ。女はどうも苦手だ。うるさくて、すぐ泣くし、凶々しいし」

目の前の美形を見つめながら言葉を連ねると、琥珀が「それって俺ですか？ 俺は男です」と大げさに嘆いた。

ニヤニヤと笑いながら「だから、女の話」と言ったら、「俺のことからかわないでください」と今度は拗ねる。

「その、新さんは女の人がだめなの？」

ずいぶんと突っ込んだことを聞いてくる。そこはスルーするべきことだろうがと思ったが、遅かれ早かれ言わなければならないのだと割り切った。

「俺はゲイじゃない。言っておくけど違うからな？ 恋愛が絡んでくるとアウトなだけだ。付き合う気満々でアプローチされるのは本当に苦手。女子は友達で充分だ。俺は彼女も結婚も子供もいらねえ」
あ、ヤバイな。ちょっと言い過ぎた。今日会ったばかりの新人に話していいことじゃない。というか、こいつは聞き上手なのか？ 俺っておしゃべりじゃないと思ったけど……。

新は「もう余計な話はおしまい」と言って食事を再開する。

琥珀も何も言わず、小さく頷いて食事を再開した。

「ひとまず……おっつ！ かれっ！ さまあっ！」

昼の営業が終わったところで、従業員たちは休憩を取ろうと控え室に入ってきた。

矢部は三人掛けのソファが空いていることに気づいて、気持ちよくそこにダイブする。

「ここは今日、俺の寝床となりました。夜が始まるまで寝るからー」

「ガッツリ寝たいなら、シェフ組と一緒にベッドに行きなよ」

トレイにケーキをいくつも載せてきた古淵が、だらしのない恰好の矢部を叱った。

「だって、俺の好きなハンモックは磯谷さんに占領されている」

控え室の隣は仮眠室になっていて、最初は二段ベッドがギチギチに詰まっていたが、誰かが「映画に出てくる収容所みたいだ」と呟いたのをきっかけに大改造をした。

今はとっってもお洒落なマットレスが敷かれ、宙にはハンモックが揺れている。気分だけでもリゾートを味わいたいという男たちの、汗と涙の結晶だ。

「新入り君は、慣れたかね？」

テーブルに料理とドリンク、デザートの写真を並べて、必死に名前を覚えていた琥珀は、古淵に問われて「少し慣れました」と笑顔で返事をした。

「頑張るのはいいけどさ、休めるときに休んでおいた方がいいよ。夜もあるんだし」

「ありがとうございます。ちょっとだけ、寝ようかなと思ってました」

古淵は「こいつはどこでも寝ちゃうから」と、もう夢の中の矢部を指さす。

「じゃあ、失礼して休ませてもらいます。おやすみなさい」

いきなり床に寝転がった琥珀に、古淵が「ええええ！」と悲鳴を上げた。驚いて矢部が目覚めます。隣の部屋から「うるさいんだけど……」と気だるい声で相原がやってきた。

そして、最後に部屋に入ってきたのは新だ。

「おい、矢部。深山に床に寝ろって言ったのか？」

「違う違う！ 井上さんっ！ 俺は濡れ衣！ 古淵く一ん、俺の無実を証明して！」

眉間に皺の寄った新の前で、矢部は慌てふためき、古淵は「無実です！」と宣言する。

「あの、眠くなっちゃったんで、俺が勝手に床に寝転んで……」

「バカかお前は。寝たいときは仮眠室。ここで寝たいなら、ソファの後ろに立てかけてあるマットレスを使え。毛布はちゃんとクリーニングに出してるから安心してかけて寝ろよ？ 空調が効いてるから風邪を引かないようにな？」

なんだもう焦って損をしたと、覗きに来た者たちは仮眠室に戻っていく。

「俺も、ケーキは冷蔵庫に入れてあとで食べよう。疲れたから寝る」

古淵は相原に「俺もそっちで寝るー」と言って付いていった。

矢部も「無実ですからー」と言いながらソファに寝転んで目を閉じる。

新はマットレスをその場で横に倒した。

「シーツや毛布はここな？ この棚。出かける用事があるなら、ディナーまでに戻って来ればいい。結構時間があるからな。けどな、新人は大抵疲れてるから、出かける用事がないなら寝てろ」

適当にシーツを敷いて琥珀を寝かせ、上から薄い毛布を掛けてやる。

「新さんは？」

「俺？ 俺は別に用事がないから寝ておこうかなと……………うわっ」

いきなり腕を掴まれて、マットレスに滑り込んだ。

いくら矢部が寝付きが良くても、もし目を覚ましてこれを見られでもしたら説明するのが面倒だ。何せみな、新の女性に対する「塩対応」を知っている。

この状態を見られたら「ああやっぱり。女子は友達と言ってるから、井上さんはそういうのが好みだったんだね。あ、偏見はないから！」と生温かく見守ってくれそうでいやだ。

なのにこの新人は。

「俺は新さんと一緒に昼寝したいと思ってるんですけど。ね？ これから新たに仲良くなっていきましょうね」

耳元に囁かれて顔が赤くなった。自分で自分が嫌だ、こんな反応。

新は「なんなんだよ」と文句を言いながら琥珀の腕から逃れようとするが、「仲良くして」と泣きそうな声で言われて動きを止めた。

「涙を武器に使うのは女だろうが」

「だって、俺、嬉しくて」

「意味が分からねえ」

「いいんです。ねえ、甘噛みしていいですか？」

「ダメだ。っていいながら首筋を噛むなっ」

「じゃあ、一緒に寝ましょう。腕枕してあげますから」

「図々しいなお前」

「それを許してくれる新さんが大好きです」

琥珀は新を抱き締めて目を閉じる。

何で俺は、今日会ったばかりの新人に、ここまで好き勝手にさせてるんだろうな。ほんと、自分の行動に理由をつけらんねえ。

と思いつつも、眠気には勝てない。

新はスラックスの尻ポケットから携帯端末を取り出すと、二時間後にタイマーをセットした。

「仕方ねえ、このまま昼寝する」

「はい。お休みなさい」

妙に慣れた手つきで腕枕をされたのには閉口したが、ふわりと香る琥珀の匂いがなぜだか懐かしくて、気がついたら眠りに入っていた。

もの凄く手触りのいい毛皮に触っている。

柔らかな体毛を指先で撫で摩りながら、「ああこれは夢だ」と気づいた。なぜなら自分は店で仮眠しているし、店で動物は飼っていないからだ。

自分が触れているのがどんな動物なのかを確かめたくて、新は目を開けて体を起こす。

くどいようだが、これは夢の中だ。

こんな風にコントロールできる夢を何と言ったか忘れてしまったが、とにかく新は、目の前の動物を見て目尻を下げた。

純白の体毛を纏った大型犬が、じっと新を見つめている。毛足は長く、首の周りは柔らかそうな長い巻毛で覆われていた。脚は太くガッシリとして、耳はピンと立っている。

「立派な犬だな」

そっと体を触り、肉付きを確かめた。

犬は大人しく触られるままだ。

ふわもふっと、指が体毛に埋もれていく。柔らかい。気になっていた首回りも慎重に触れた。

柔らかいどころの騒ぎじゃない。掌が至福だ。一度触れたら、手を離すのは容易なことではない。

「なんだよお前……。どこの犬だ？ 俺の夢に出てきたってことは、もしかしてこれは正夢か？ 俺はお前みたいな立派な犬を飼うのか？」

犬は真っ黒な鼻を新の頬に押しつけ、ピスピスと甘え声を出した。可愛い。

最近変な夢ばかり見ていたから、動物が夢に出てくると癒される。

「抱き締めても、いいよな？ これは夢だし」

それでも、「噛まないでくれよ」と囁きながら、新は犬の首に両手を回し、もふもふの体毛に顔を埋めた。

犬特有の匂いなどこれっぽっちもなく、代わりに太陽の匂いがした。正確には、日干しした布団の匂い

だ。最高の匂いを胸一杯に吸い込んで、新は目を閉じた。至福で死ぬる。

「なんだよもう。犬の毛ってこんなに柔らかかったっけ？ 最高じゃないか。なんかまた眠くなってきた」

犬は首筋をひと舐めすると甘噛みしてきた。

「くすぐってえって……」

夢の中でまた寝るなんて不思議だが、とにかく気持ちがよくて意識が浮遊する。

「あー、もうだめだ。次に目を覚ましたときに、お前が目の前にいればいいのに」
思わず無理難題を言ってしまう。

新に抱きつかれた犬は、小さく笑って「無理です」と言った。

いや、そう言ったような気がした。

眠りから覚めると、綺麗な顔が目の前にあった。

長い睫に高い鼻。あどけない表情を見せて眠っている琥珀を見つめ、「犬じゃなかった」と呟く。
もし本当に夢の中で出会った犬が目の前にいたら、家に連れて帰ろうと本気で思っていたのだが、夢は夢で、それ以上でもそれ以下でもなかった。

新は体を起こしてぐっと伸びをすると、ずいぶんと疲れが取れていることに気づく。

まるで、ぐっすり眠った日の朝のように、目覚めがスッキリしていた。

「井上さんおはよう～。新人君はどう？」

控え室に顔を出した相原は、手を振りながらあくびをする。いい男が台無しになっても気にしないようだ。

「あー……なんかぐっすり寝てるぞ。凶太いな」

「へえ……って、一緒に寝てたんだ」

「やむを得ずだ」

「別にさ、俺は井上さんの性癖とか？ 嗜好とか？ 気にしないから」

「おい」

「恋人ができるっていいことだと思うよ。これってやっぱり一目惚れ？ 運命の出会い？ ドラマティックでいいなあ。とにかく俺は応援するからね」

「あのな、勝手に話を作るなよ」

真顔でグッと親指を立ててみせる相原に、新も真顔で「ゲイじゃない」と言い返す。

「分かった。そういうことにしておきますねー」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>